

資料

集団決定における決定状況と決め方の方略の選択

木下 芳子*

DETERMINANTS OF STRATEGY CHOICES IN DECIDING
AN ORDER OF PREFERENCE FOR A GROUP

Yoshiko KINOSHITA

This study aimed at examining what strategy a person would choose in deciding an order of preference for a group. One hundred and thirtyseven undergraduates and 71 fifth graders participated in this experiment. Subjects were shown patterns of individual preferences for three alternatives. The preferences were given by a group of three members. The subject's task was to decide upon an order of preference for the group, based on the preference order patterns. Subjects were also asked to describe how they had decided on such an order of preference for the group. Undergraduates were assigned 3 conditions. In these conditions, expressions concerning the degree of preference by each member of the group, for the three alternatives, were changed. Fifth graders were assigned 2 conditions. It was found that undergraduates changed their strategies according to the degree of preference by each member of the group and to the importance of the issue to be decided. While fifth graders discriminated the difference in importance among the issues to be decided, they did not change their strategies.

Key words: group, decision-making, strategy choice, majority rule, concession-oriented strategy.

集団の中で、各成員の意見をまとめて、集団としての決定をしていく過程は、1種の問題解決過程と考えられる。そこでは、各成員の意見が、その場面の諸特性に関して考慮され、成員の価値観にそって、1つの決定がなされる。しかし、現実の決定場面は、複雑で、決定場面そのものから、どのような要因が決定にかかわるのかを、分析していくことは、非常に難しい。

佐伯・富田(1977)は、集団のなかでの意見が調整される過程を、社会的決定理論(social decision theory)のモデルを用いて研究する方向を示した。すなわち、3人の構成員で成る集団を想定し、その3人が3つの異なる選択肢A、B、C、に対して、それぞれの意見(個人的嗜好順序 individual preference order)をもつとき、人々が、3人の意見分布から「どのような決定を最も望ましいと

かんがえるか」ということを通して、決定過程を分析しようとした。現実の決定場面でも、各成員がそれぞれの場面で、どのような決定方法を望ましいと考えるかは、集団の決定において、重要な役割を果たすであろう。このような決め方についての認知的側面の研究は、決定行動研究のなかの重要な部分を明らかにすると思われる。

この方向に沿って木下(1984)は、3人の成員で成るモデル的集団での決定状況で、種々のタイプの意見分布の決定場面を示し、成人、中学生、小学生が各意見分布に対し、それぞれどのような決め方のストラテジーをとるかを調べた。結果は、被験者は、同じような意見分布にたいしては、比較的一貫した決め方のストラテジーをとること、一般に、多数決原理がよくとられること、しかし、成人は必ずしも多数決によるとは限らず、多様なストラテジーをとること、中学生では、成人に似た方法がとられるが、小学生では、使われるストラテジーが限

* 埼玉大学(Saitama University)

られることが明らかにされた。

佐伯・富田や木下のこれらの研究では、モデル的決定状況を扱っているため、選択肢に対する意見の分布は示されたが、決めるべき事がらや選択肢の内容は具体的には示されていない。したがって、各被験者が、どのような具体的決定場面を想定して判断したかは、明らかではない。人々がよいと考える決め方の原理は、決定場面の諸特性によって、変えられるのではないだろうか。もし、変えられるとしたら、どのようなときに変えられるのだろうか。

佐伯・富田(1977)では、集団の選好順序の決定に際して、当該決定に先立つ決定において、譲歩したかどうかといった文脈的条件が考慮されることが示されている。

さらに、決め方を規定する条件として、もう1つ考えられるのは、決定する事がらの重要性である。同調行動の研究においても、成員にとっての課題の重要性が、同調の生じやすさにかかわることが明らかにされている(例えば、木下, 1964)。決められるべき事がらが、成員にとって、重要かどうかということは、決定方法の選択に当たっても、なんらかの影響をおよぼすと考えられる。

一般に、社会的決定理論のモデルでは、各成員の選好の程度は考慮されずに、賛否の度合は同じ重みとして扱われることが多い(佐伯, 1980)。しかし、いくつかの選択肢にたいする、賛成、中立、反対の人数が示されるとき、同じ多数決の原理に従っても、反対の人を考慮するかどうかなどのサブルールによって、決定の結果が異なる事もある(近藤, 1981)。現実の決定においては、各成員の賛否の度合を考慮して決める事も多いのではないだろうか。この点に関して、木下(1984)では、各成員の選択肢に対する選好の程度が、ストラテジーの選択にかかわることが示されている。

本研究では、木下(1984)の方法にしたがい、集団での決定方法の選択が、どのような条件によって規定されるのかを、認知的側面から検討していくことを目的とする。特にここでは、決め方のストラテジーの選択を規定すると考えられる条件の中で、上記の選好程度のちがいと決定事項の重要性について、より具体的状況を用いて検討する。

選好程度のちがいに関して、木下(1984)ではつぎのような結果を得ている。すなわち、3つの選択肢に対する選好の程度が、「1位」、「2位」、「3位」と順位で示されたとき(O群)と、「とてもよい」、「よくもわるくも」どちらでもない、「とてもよくない」と、肯定的態度または否定的態度として示されたとき(PN群)では、同じタイプの意見分布であっても、各ストラテジーの採用さ

れる割合が異なっていた。成人および中学生では、後者の場合のほうが、多数決によらない方法が、より多くとられた。しかし、小学生では、2つの場合に、明らかながいはいはみられなかった。

このことは、次のように考えられよう。大学生、および中学生では、決定に際して、成員の選択肢に対する賛成の程度とともに、反対の程度も考慮された。PN群の「とてもよい」、「どちらでもない」、「とてもよくない」は、各選択肢にたいする成員の意見が、「賛成」、「中立」、「反対」として、はっきりと区別できる。そのため、3位の選択肢が、「とてもよくない」という拒否的表現で示された場合には、明らかに強い反対意見と考えられ、反対意見を考慮するストラテジーが多くとられた。それに対して、選好程度を「1位」、「2位」、「3位」と順位のみで示された場合には、3位の選択肢をその成員が「3番目によい」と賛成しているとも、「よくない」と反対しているとも解釈できる。そのため、反対意見を考慮するストラテジーは、PN群よりも少なかったのであろう。この結果は、「成人では、もし、誰もが我慢できることなら、多数決による方法がとられるが、もし、誰かいやがる人がいれば、譲り合って、全員が一致できる方法がもとめられるのではないかと考察されている。

木下(1984)での、PN群とO群の間に見られたストラテジー選択のちがいについて、上記のような解釈が妥当かどうかは、次の事でより明らかにできるだろう。もし、3つの選択肢に対する選好程度が明らかに肯定的態度のみで示された場合には、すなわち、選好順位の1位、2位、3位がそれぞれ、「とてもよい」、「よいほうである」、「(よくもわるくも)どちらでもない」で示された場合には、強い賛成、弱い賛成、中立の態度として区別できる。従って、反対を考慮する必要はなく、賛成者の多い選択肢を採用するようなストラテジーが多くとられるであろう。すなわち、多数決が上記の2つの場合(PN群、O群)よりも多くなると思われる。ここでは、選好程度を肯定的態度でのみ示す条件(PP群)を加えることにより、この点を、より明らかにしたい。

次に、決定事項の重要性についてだが、重要性という場合、その内容が集団全体にとって重要か、個人にとって重要かということによるちがいも考えられる。ここでは、「各成員にとって、決定がどれだけ重要か」についての被験者の判断によった。この事が、集団としてのまとまりを考えたりえでの重要性と一致するかどうかは、ここでは明らかではない。しかし、少なくとも、決定において、「もし、がまんできることなら公平に多数決」という前提がとられるなら、各個人にとっての重要性も

決定の戦略の選択に当たって、考慮されるであろう。決められるべき事がらが、各成員にとって、重大な意味があることであれば、一人一人の立場をより考慮し、全員の合意を得る戦略がとられるであろうし、比較的意味のないことであれば、多数決のような慣習的方法がとられるであろう。

以上のことから、成人については、具体的には、次の事が予想される。

1. 決め方の戦略は、成員の選択肢に対する選好の程度によって選ばれるであろう。選択肢に対して拒否的態度が含まれる場合は、肯定的態度のみの場合よりも、譲り合い、全員の合意を求める全員一致志向型の戦略が、より多くとられるであろう。また、多数決原理による戦略は、より少なくなるであろう。選好順序が順位で示される場合は、この両者の場合の中間になるであろう。

2. 決め方の戦略の選択は、各成員にとっての、決定事項の重要性によってもかわるであろう。決定事項の重要性が高いほど、全員一致志向型の戦略がより多くとられるであろう。また、重要性の低いときには、多数決による方法が、より多くとられるであろう。

3. 2.の決定事項の重要性は、拒否的態度が示される場合のほうが、他の場合より、強く影響するであろう。

決定行動の発達については、これまでほとんど明らかにされていない。木下(1984)では、小学生が多く用いる戦略は成人のそれとちがうこと、また、選好程度のちがいによって戦略の選択に明確な違いはみられないことが示された。しかし、小学生の戦略の選択において、どのようなことが考慮されるかについては、あまりわかっていない。ここでは、小学生についても、成人と同じ状況で判断させることにより、子どもの決定行動に関する資料もあわせて検討したい。先行研究では、選好程度が順位で示されるか、肯定一拒否で示されるかによって、選択する戦略に有意な違いはみられなかった。そこで、ここでは、最も条件が異なると思われる肯定的態度のみの場合と拒否的態度のふくまれる場合の2条件についてのみ実施する。

方 法

被験者：小学校5年生(11歳0か月-11歳11か月)71名、大学2年次生137名をクラス単位で次のいずれかの群に割当てた。

大学生 P P群 51名(男19, 女32)
O 群 33名(男14, 女19)

P N群 53名(男24, 女29)

5年生 P P群 32名(男16, 女16)

P N群 39名(男21, 女18)

実験材料：実験課題では、3人の成員で構成する集団(班、グループ)が想定されている。その集団で決めべき事がらの選択肢として、A, B, C, の3つがあげられている。この選択肢に対する3人の成員各々の選好順序が示される。被験者は、3人の意見の分かれ方(意見分布)から、これらの選択肢に対し、この集団としての選好順序を決めるとしたら、どのような順序づけが好ましいかを判断することがもとめられる。

練習課題—集団の構成員は、それぞれ、○子, ×子, △子とされ、この3人が1つの班であるとされる。この班の担当する仕事として、保健係, 掃除係, 給食係の3つの選択肢がある。これらに対する3人のそれぞれのやりたい順序(意見分布)が示される。被験者は、3人の意見をまとめて、班としての希望順序を決めなくてはならないとき、どのように決めるのがよいかを考えるように求められる。

本課題—本課題では、決めべき事がらの内容については、具体的に示されるが、選択肢はA, B, Cで示される。意見分布の基本的タイプとしては、TABLE 1に示す10タイプが考えられるが、この中から、先行研究を参照し、種々の戦略のでやすい、タイプ2, 5, 7の3タイプを用いた。各タイプごとに、重要性の高い事項と低い事項の決定場面を各1場面づくり、計6場面について実施した(3タイプ×2重要度(H:L))。

重要度の異なる場面の選定は、10の日常的場面について、本実験の被験者以外の大学生20名に、「それぞれの事がらがどのように決まるかが、集団の成員にとって、どのくらい重要だと思うかを、自分も成員の一人として考えよ。」という教示で、6段階評定させた。そして、評定値の平均の高いものから3場面、低いものから3場面を採用した。したがって、各タイプの意見分布につき、重要度の高い場面と低い場面のそれぞれ1場面ずつがあ

TABLE 1 意見分布の基本的タイプ

	1	2	3	4	5
タ	ABC	ABC	ABC	ABC	ABC
	BCA	BCA	BCA	BCA	ABC
	CAB	CBA	ACB	BAC	BCA
イ	6	7	8	9	10
	ABC	ABC	ABC	ABC	ABC
ブ	ABC	ABC	ABC	ABC	ABC
	CAB	CBA	ACB	BAC	ABC

る。各場面は、つぎのような内容であった。

重要度高 (H) : (1)作品コンクールに出す班の共同製作に何をつくるのか, (2)皆が楽しい思い出に残るよう, お別れ会に班としてやること, (3)1年間かけて, 班で取り組む共同研究のテーマ。

重要度低 (L) : (1)クラスで飼うウサギの名前を, 飼育係3人の意見として提案する, (2)班ノートをつくり, 班ごとに色を決める, (3)クラス新聞の名前を各班ごとに考えて出す。

各選択肢に対する選好の程度は, 次のように提示した。PP (肯定群) 群—「とてもやりたい (または, とてもよい)」、「まあまあやりたい (または, よいほうである)」、「どちらでもよい (または, どちらでもない)」。O群 (順位群)—「1位」、「2位」、「3位」。PN群 (肯定・拒否群)—「とてもやりたい (または, とてもよい)」、「どちらでもない (または, どちらでもよい)」、「とてもやりたくない (または, とてもよくない)」。

6場面はランダムな順序で提示された。各場面では決定場面の記述のあとに, 3つの選択肢A, B, Cに対するメンバー3人の各々の選好順序が示されている。被験者は, この班 (集団) の決定として, どのような選好順序にするのがよいかを書き, さらに, どのように決めたかを記入するよう求められた。課題の例を付録資料に示す。

手続: 被験者は, まず, 課題の意味を理解するために, 別の具体的場面で練習する。その後, 本課題を行った。実験は, 実験者が1場面ずつ読み上げ, 判断を求めた。決め方の記入については, 予め, 種々の決め方があることを話し, その例として, TABLE2に示された8種類の決め方のストラテジーを書いたプリントを配布し, それぞれのストラテジーについて, 詳しく, 例をあげて説明した。被験者は, 各場面でのどのように決めるのがよいかを考え, 集団としての順位を決めること, さらに, どうやって決めたかを, 8種類の決め方のストラテジーの中から1つ選択するか, 別の方法を考えた場合には, 自分で決め方を記入するようにと教示された。自分で決め方を記入する場合には, どの様に決めたかがわかるように, 詳しく, 具体的に書くようにと指示された*。

被験者は, 6場面について, その集団としての決定と, 決め方について答えた後, 各場面について, 「このような

* 小学生では, 例示したストラテジーの記号を書かず, 自分で決め方を記入したものが約1/4あった。しかし, そのほとんどが, 例示した「決め方」の記述どおりに書いたもので, ストラテジーを容易に判別できた。判別出来なかった反応は, 「その他の決め方」として分類した。

TABLE 2 選好順序の決め方

イ) 2人が1位にしている選択肢を集団の1位とし, 残りの1人が1位にしている選択肢を2位とし, 残りの選択肢を3位とする (1位がバラバラのときは, 同様に, 3位から決めていく)。
ロ) 誰かが3位にしているものは, たとえ2人が1位に挙げていても1位にしないようにし, あとは上位の選択の多い順に決めていく。
ハ) 2位までを, 同等とみなし, 2位までの中から3人が一致できるものを1位として決めていく。あとは上位の選択の多い順に決めていく。
ニ) AとB, BとC, CとAと比べて, より上位のものから順に決めていく。
ホ) 1位, 2位, 3位にそれぞれ重みづけをし, 合計点の多い順に順位を決める (同点の時は, より上位のものから)。
ヘ) 各順位ごとに見て, 多い選択肢を, その順位にあてる。
ト) 1位から3位までの全体の順位が, 2人の成員で一致したら, それが集団の順位とされる。
チ) その他。

事を決めるとしたら, どのように決まるかということが, 自分にとってどのくらい重要か (または, 気がかりか) を6段階の評定尺度で答えるよう求められた。

実験は, 1クラスごとに, 集団的に実施された。

結 果

TABLE2に挙げられた決め方のストラテジーを, その背後にある原理から, つぎの5つの型に分類した。

1. 少数者配慮型多数決: 1位を決める時には, 多数決原理によっているが, 2位を決めるときに, 少数者の意見を組み入れようとする。(イ)の決めかた, または, 同じ原則で3位からきめていく決め方。)
2. 全員一致志向型: 譲れる範囲で譲り合い (2位までを同等とみなし), 3人の一致できるもの, 誰もいやがるものがない選択肢を集団の1位とする。(ロ), ハ)の決め方。)
3. 合理的多数決: 意見分布を全体的に考慮し, 合理的に, より多数が希望するものから, すなわち, より上位に選ばれた選択肢を上位として決めていく。(ニ), ホ)の決め方。)
4. 部分的多数決: 各順位ごとに見て, 多数に選ばれた選択肢を集団の選好順位としていく。または各成員の選好順位全体をみて, 2人以上が同じ順位なら, それを集団の順位とする。すなわち, 多数決を部分的に当てはめていくやりかた。(ヘ), ト)の決め方。)
5. その他の反応。

この分類にしたがって, 大学生および小学生が, 重要性の異なる各3場面で, 各型のストラテジーを選択した

TABLE 3 大学生各群の選択した決め方の方略
(上段・総度数, 下段・%)

群(N)	PP (51)			O (33)			PN (53)		
	L	H	L+H	L	H	L+H	L	H	L+H
少数者配慮型 多数決	22 (14)	18 (12)	40 (13)	11 (11)	9 (9)	20 (10)	15 (9)	8 (5)	23 (7)
全員一致志向 型	64 (42)	75 (49)	139 (45)	40 (40)	58 (59)	98 (49)	93 (58)	113 (71)	206 (65)
合理的多数決	32 (21)	30 (20)	62 (20)	20 (20)	14 (14)	34 (17)	23 (14)	19 (12)	42 (13)
部分的多数決	33 (22)	25 (16)	58 (19)	27 (27)	18 (18)	45 (23)	27 (17)	18 (11)	45 (14)
その他・無回 答	2 (1)	5 (3)	7 (2)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	2 (1)
計	153	153	306	99	99	198	159	159	318

数, およびその割合を示したのが TABLE 3, TABLE 5 である。

1) 選好程度と決め方の戦略

まず, 大学生の各群の決め方を比較してみる (TABLE 3)。6 場面 (H+L) での 5 つの型の戦略の, それぞれが採用された割合を比べると, PP 群と O 群では, 同じような割合で採用されている ($\chi^2=5.16, df=4, n.s.$)。それに対し, PN 群は PP 群, O 群との間に有意な差が見られた (PN:PP, $\chi^2=25.64 (p<.01)$, PN:O, $\chi^2=12.52 (p<.05), df=4$)。各戦略ごとに, 全反応の中で割合を比較すると, 全員一致志向型は, PN 群, O 群, PP 群の順に多く, PN 群と O 群, PN 群と PP 群の間に有意差が見られた (PN:O, $\chi^2=11.78, PN:PP, \chi^2=23.63, p<.01, df=1$)。また, 全反応の中で多数決原理による決め方 (すなわち, 合理的多数決と部分的多数決の合計) は, PP 群, O 群では PN 群よりも多くとられた (PN:PP, $\chi^2=9.89, PN:O, \chi^2=8.79, p<.01, df=1$)。PP 群と O 群の間に, 有意な差は見られなかった。一方, 少数者配慮型の多数決は, 全般的に少ないが PP 群, O 群, PN 群の順に多くとられ, PP 群と PN 群の間のみ有意であった ($\chi^2=5.86, p<.05, df=1$)。

2) 決定事項の重要性

決定事項の重要度が異なると仮定され設定された 6 場面が, 被験者にとっても, 重要性が高い, または低い場

面となっていたらどうか。TABLE 4 は, 重要度の高い 3 場面と低い 3 場面の評定値の群ごとの平均値である。どの群でも, 重要度が高いとされた 3 場面の評定の平均値は, 低いとされた 3 場面の平均値よりも有意に高くなっている。意見分布の各タイプにつき, 重要度の高低の対の場面ごとに比較しても, 全タイプに重要度において有意なちがいが見られた。

各群ごとに, 重要度のちがいと決め方の戦略を比べると, O 群と PN 群では, 重要度の高い場面の方が低い場面よりも, 全員一致志向型の戦略が多くとられ (O 群, $\chi^2=6.54, PN 群, \chi^2=5.51, p<.05, df=1$), 多数決の戦略は少なくなっている (O 群 $\chi^2=4.74, p<.05, PN 群 \chi^2=2.67, n.s, df=1$)。それに対し, PP 群では, 重要度による戦略選択のちがいは, 見られなかった。

3) 小学生の決め方の戦略

小学 5 年生の各群の選択した戦略の頻度, および割合を TABLE 5 に示す。各型の戦略の全体的分布に関して, PN 群と PP 群間に有意差が見られた ($\chi^2=10.54, p<.05, df=4$)。しかし, 各型の戦略ごとに, 全反応のなかでの用いられた割合を比較すると, 全員一致志向型, 合理的多数決, 部分的多数決のいずれにおいても有意差はなかった (それぞれ $\chi^2=0.48, 0.10, 1.31, n.s, df=1$)。分布の差は, 少数者配慮と, その他の反応が PP 群でやや多かったことによると思われる (少数者配慮, $\chi^2=4.66, その他, \chi^2=5.25, p<.05, df=1$)。決定事項の重要度のちがいに関しては, TABLE 4 に示されたように, 小学生でも重要度の評定において, 大学生と同様に評定している。しかし, 決め方の戦略の選択のしかたに関して, 重要度のちがいによる差は, いずれの群においてもみられなかった。

大学生の反応と比較すると, PN 群, PP 群のいずれにおいても戦略の選択のしかたに, 大きなちがいがみられた (PN 群, $\chi^2=101.94, PP 群, \chi^2=50.89, p<.01, df=4$)。両群とも, 全員一致志向型の戦略は, 小学生では少なく (PN 群, $\chi^2=69.80, PP 群, \chi^2=18.82, p<.01, df=1$), 部分的多数決が小学生では多く採

TABLE 4 決定事項の重要度の平均評定値 (レンジ 1-6)

群	大学生 PP		大学生 O		大学生 PN		5 年生 PP		5 年生 PN	
	(L)	(H)	(L)	(H)	(L)	(H)	(L)	(H)	(L)	(H)
重要度										
平均評定値	2.93	5.01	2.69	5.11	2.69	5.11	2.73	4.68	2.79	4.71
SD	0.91	0.78	0.75	0.65	0.75	0.65	0.76	0.80	0.91	0.89
L と H の差の検定	p<.001		p<.001		p<.001		p<.001		p<.001	

(評定値は, 数値の高い方が重要であることを示す。)

TABLE 5 5年生各群の選択した決め方の方略
(上段・総度数, 下段・%)

決め方	群(N)			群(N)		
	重要度			重要度		
	L	H	L+H	L	H	L+H
少数者配慮型多数決	6 (6)	6 (6)	12 (6)	2 (2)	3 (3)	5 (2)
全員一致志向型	26 (27)	24 (25)	50 (26)	33 (28)	35 (30)	68 (29)
合理的多数決	15 (16)	18 (19)	33 (17)	20 (17)	23 (20)	43 (18)
部分的多数決	40 (42)	38 (40)	78 (41)	57 (49)	51 (44)	108 (46)
その他・無回答	9 (9)	10 (10)	19 (10)	5 (4)	5 (4)	10 (4)
計	96	96	192	117	117	234

用された(PN群, $\chi^2=68.91$, PP群, $\chi^2=27.91$, $p<.01$, $df=1$)。

討 論

以上の結果から, 成人では, 集団としての決定を下すにあたって, 種々の配慮がなされることがわかる。ここでは, その1つとして, 選択肢に対する成員の態度(選好の程度)によって, ストラテジーが変えられることが示された。どの選択肢にたいしても, 明らかに肯定的であるPP群では, 他の群よりも, 多数決が多く採用されたのに対し, ある選択肢について, 拒否的態度が示されたPN群では, 譲り合い, 全員の合意を求め, 全員一致志向型のストラテジーが, 他の群よりも多く採用された。また, 単に選好の順序のみを示されたO群は, その中間で, よりPP群に近い反応が示された。これは, はじめに予想した結果と一致している。成人では, 多数決を合理的で, 公平な決め方の原則として認め, 各成員が, がまんできる範囲ではそれを用いながらも, がまんできないものがある場合は, みんなで少しずつ妥協して, 集団の総意を決めていくのがよいと考えるのであろう。

決める事項に関しても, 同じように考えられる。PN, O群では, 重要度の高い事項では, 全員一致志向型の方略が, より多くとられたのに対し, 低い事項では, 多数決原理(合理的, 部分的)がより多くとられた。また, 決定事項の重要性によるストラテジーの選択のちがいは, PP群でよりも, O群, PN群でより大きかった。これらの結果は, はじめの予想と一致するものであった。大学生の反応の中には, 「研究なので, 多くの人が興味を持つもの」とか, 「研究なので, 1位のもの, を, 重視する」など, ストラテジーの選択にあたって, 決定事項が考慮されたことを示す記述も見られた。

ここでは, 決定事項のちがいを, 各被験者にとっての

重要性のちがいという点から, 評定値によって分けて考えたが, 重要度の高いとされた3場面と低いとされた3場面を比べると, 後者は比較的個人の好みに関することであるのに対し, 前者は, 成員が参加して, 集団として行うことに関する。決定事項の重要性をこのように, その質的差異として, 検討することが, 今後必要とされるであろう。

小学生の反応については, 全員一致志向型についても, 多数決についても, 2群の間にストラテジーの選択のちがいはみられなかった。また, 重要度による選択のちがいはみられなかった。

大学生の反応とくらべると, 小学生では, 部分的多数決が非常に多く採用されている。本実験は, 具体的場面を用いて行ったが, この結果は, 具体的場面ではない決定状況でなされた先行研究の結果と一致している。これは, 5年生の子どもにとっては, すでに多数決が, 公平な決め方の原理として, ひろく認められているが, 合理的多数決は, 情報処理のうえで複雑なため, 部分的多数決のかたちで実行されるためと思われる。しかし, 木下(1984)では, あまりみられなかった全員一致志向型のストラテジーも, ここではかなりみられたことから, 小学生でもいろいろな決め方があることを知らされれば, 部分的多数決以外のストラテジーも使い得ることが伺える。

本研究は, 集団内での決め方のストラテジーの選択が何によって規定されるかを通して, 人々が個人間の要求や意見を調整しようとする仕方をさぐろうとした。このような決め方は, 文化的, 社会的規範などによって, おおいに変わることが予想される。今後, 検討していきたい。

引用文献

- 木下稔子 1964 集団の凝集性と課題の重要性の同調行動に及ぼす効果 心理学研究, 35, 181—193.
木下芳子 1984 社会的選好順序の選択に関する方略の発達 教育心理学研究, 32, 25—32.
近藤次郎 1981 「意思決定の方法」 日本放送出版協会
佐伯胖・富山慶典 1977 「譲り合い」による社会的決定に関する実験的研究 行動計量学, 5, 17—29.
佐伯胖 1980 「決め方の論理」 東京大学出版会

付録資料

提示場面の例(PN群: タイプ5, 重要度L)

○子と, ×子と, △子の3人は, クラスの飼育係(しいくがかり)です。こんど, クラスで飼っている, うさぎの名前をつけることになり, 飼育係が考えて, ていあ

んすることになりました。A, B, C, の3つの名前が考えられました。3人は、それぞれ次のような意見をもっています。3人の意見をまとめて、飼育係の意見として、順位を決めるとしたら、どのように決めたらよいでしょう。

1)に係としての順位を書いてください。2)また、どのようにして決めたか、決め方を{ }の中にかいてください。

{	3人の意見			
	とてもよい	どちらでもない	とてもよくない	
○子	A	B	C	
×子	B	C	A	
△子	A	B	C	

- 1) 1) しゅう係としての順位
 1位 _____ 2位 _____ 3位 _____
 2) どうやって決めたか

{ }

[の部分]は、各群で、つぎのように変えられた。

O群:

3人の意見 (よいとおもうじゅんぼん)

1位 2位 3位

PP群:

3人の意見

とてもよい よいほうである どちらでもない

付 記

本研究をすすめるにあたり、東京都大田区立南六郷小学校の先生方のご協力をいただいた。厚くお礼を申し上げます。

(1988年4月23日受稿)